

やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」(青森)発行

誌 名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	16 / 2001 / 19-23
タイトル	さまよえる八甲田山のヒメギフチョウ
著 者 名	室谷洋司

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

さまよえる八甲田山のヒメギフチョウ

10代 室谷 洋 司

あこがれの「春の女神・ヒメギフチョウ」

「やぶなべ会」で有名な青森高校の生物部に入ったのは、1955(昭和30)年であった。もっぱらチョウに関心をもっていて、その昆虫趣味は小学5年のときから。それが今まで続いているのだから、もう50年にもなる。生まれたところが今の青森空港真下の高田で、当時の採集場所はおのずとこの周辺に限られていた。生物部に入ってから、八甲田山、滝沢、水源地などと行動エリアが広がり、新しいチョウの種類も加わり、胸をときめかせた。

チョウの採集にのめり込んでいくと、どうしても今まで採ったことのない種へのあこがれが強くなる。なかでもギフチョウとかヒメギフチョウは垂涎的。俗に「春の女神」といわれ、カタクリの花に蜜を求める清楚で美しい姿はいいようもない(写真1)。当時の参考書となる図鑑は、まことにおおざっぱなもので、ギフチョウは新潟以西が分布圏とあるから青森では不可能。ところがヒメギフチョウの方は、東北にもいるとあるから、ちょっとしたら青森にもいるのでないかと、春になるとまわりの雑木林を探して歩いた。



写真1 カタクリに吸蜜する
ヒメギフチョウ

高田の裏山でも、また小館、入内方面でもカタクリの群落はどこにでもある。幼虫の食草となるウスバサイシンも特徴があるのですぐ見付き、カタクリのあるところには大体、セットで生えている。4月から5月になると、このような所にはよく採集に行った。むこうから黄色っぽい小形のアゲハが飛んでくる。追っかけてネットにおさめる。キアゲハの春型だ。木の梢のあたりをヒラヒラ飛んでいる。下にこないかと待って、苦労してネットイン。これまたキアゲハだ。

南八甲田西麓が青森県のメッカ

毎年、春はこの繰り返し。生物部に入ってからには部に備え付けの昆虫専門雑誌「新昆虫」を見た。すると、ギフチョウ属の専門家で当時、国立科学博物館にいた新村太郎氏の詳しい分布図(図1。新村、1950)が載っていて、東北地方にはポツンぽつんと印がつけられ、何と十和田湖の北西にも印が1個あるではないか。あとで

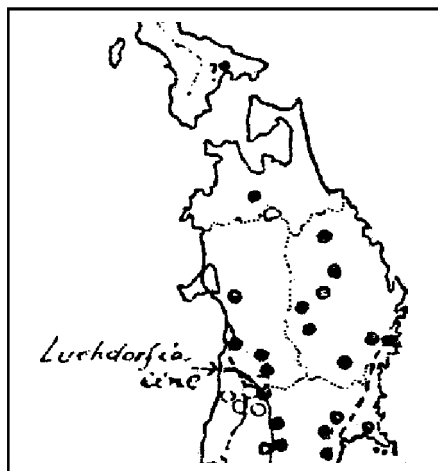


図1 1950年当時のヒメギフチョウ分布図
(新村、1950を改写)

知ったことだが、これは1949年5月9日の下山健作氏の快拳にもとづくもので、南八甲田西麓の平賀町葛川でキブシの花に飛来したヒメギフチョウの青森県初記録であった。

青森県にもヒメギフがいる、それは平賀町だ!! その後はもっぱらそちらの方に目が移っていった。生物部のOBになってから、弘前で学び就職することになった。毎年、弘前公園の桜の時期になると花見の雑踏から逃れ、平賀町の山や黒石市の二庄内、中野神社にヒメギフ狩りにいった。生物部の後輩たちもここに集まった。青森から朝早く自転車でやってきたと、ほこりまみれになりながらネット

を振り回す頼もしい面々であった。ヒメギフは当時、このあたりの特産であったのである。八甲田山系には違いないが青森の我々には、ちょっと離れ過ぎていて、肩身がせまかった。

1983年、驚くべき下湯高地での発見?!

本種の産地はその後の調査でいくらか拡大していったが、青森県の西南地域から出ることはなかった。

そこに、1983年の青森市郊外入内で2♂が採れたという知らせである。発見者は岩手県久慈市出身で当時、青森に転勤して間もない白山一訓氏である。彼はその後、入内からさらに奥に入った下湯高地の海拔600メートル地帯でも、オクエゾサイシンを食べているヒメギフを見つけた。

私にとっては、ゴツンと棒で頭を殴られたようなショックであった。白山氏の発見のキッカケはごくごく世俗的なもので、たまたま休みの日にタケノコ採りに出かけたら飛んでいた。下湯高地の発見も、さらに奥山にタケノコを求めて入ったらいっぱい飛んでいた、というのである。

自分の膝元にヒメギフがいた!! あんなに求め歩いた入内にいた。しかも少なくともこの発見当初の何年かは多産地と言えるものであった。自分の目は節穴だらけだったのか。

このチョウの幼虫が食べるウスバサイシンとかオクエゾサイシン(当時は、北海道のヒメギフだけがこれを食べると言われていた)は、カンアオイ属の植物で、この面の研究大家として知られる前川文夫博士は、この属の分布拡大は1万年に1キロなどとし、したがってギフチョウ属の分布も遅々として、ひじょうに土着性の強いものと見なされていた。

ブナ伐採地がオクエゾサイシンの大株畑

とにかく調査だ、と仲間の協力を得て「なぜ入内、下湯高地にヒメギフなのか?!」を合い言葉に下湯高地通いが始まった。その年の5月のことであった。

現地は鬱蒼と繁ったブナ林が口の字型に伐採され、その後にスギを植林して1年とか、5年、7年などの様々なブロックがあった。下刈りが行き届いていて5年以上の一带はみずみずしい新緑のブナ林に囲まれ残雪がまだあったが、消えたところからキクザキイチリンソウやフキノトウ、スミレ類、さらにシラネアオイの群落が見られ、一面にすばらしい花園が広がっていた。日が照るとあちこちをヒメギフが飛び、日が陰ると地面に静止する。まるで高山蝶の飛翔を見る思いで、夢心地そのものであった。

さらに驚いたのは、本州で初めて食草として確認されたオクエゾサイシンは大株ものがゴロゴロ生えていた。餌には事欠かない。成虫にしてもフキノトウやスミレ類の花から十分栄養がとれる。

2年間の調査で、オクエゾサイシンはブナ林の中に小株が散見されるが、ブナが伐採されるとネズミ算式に株増殖する。ブナ林内の株は普通、葉が1~2枚だが、伐採地では一株から20枚以上の葉を付けているのがざらにある。

カンアオイ属の花は根元にあるため種子の散布力が弱く、分散は極めて遅いというのが定説であったが、決してそうでない。これらのタネにはカルンクルというアリの好む脂肪体物質が付着していて、根元にこぼれたタネをアッという間にアリが運んでいく(写真2)。なかには巣に運ぶ途上で凸凹に引っかかり放置されるタネがある。これらが発芽して、相当の距離に分散していくのである。

青森市桜川の自宅の庭には飼育用にカンアオイ属の各種を植えている。ここには、クロヤマアリ、カワラトビイロケアリ、アズマオオズアカアリなど、大小さまざまな4種のアリが巣くっている。土の上にウスバサイシンのタネを置いてみた。すぐアリが集まってきた。クロヤマアリはタネを置いた場所から15メートル離れたところに巣があったが、10個のタネは27分間でそこに運ばれてしまった。運搬速度はタネ1個あたり最も早かったのは2分25秒、遅かったものでも6分であった。(以上、室谷・白山、1986)



写真2
ウスバサイシンのタネを運ぶアリ

ヒメギフチョウの飛翔力

下湯高地の調査で食草の増殖とその分散力の実態がよくつかめた。これらの環境を舞台に生きるヒメギフは、どのようにして分布を広げるのか。

私には、付近を縦断する送電線が気になった。同地の精密な航空写真を手に入れた(写真3)。するとあまりにも仮説通りのお膳立てが整っていた。下湯高地の直下

には矢別発電所がある。そこから海拔600メートルのブナ伐採地に道路のような空間が続き、さらにその道路は黒石～中野ラインの方向に伸びている(写真3。白い帯は送電線下の下刈り部分で、下が矢別方向、左が中野方向。黒っぽい一帯はブナ林、口の字型で白っぽいのは伐採地の発生地)。これがヒメギフ拡散のブリッジではないのか。そしてヒメギフは矢別からさらに北八甲田に広まっていくだろう。

ヒメギフ成虫の野外観察では発生地から矢別方向に飛んでいって、また風に吹き返されてくるという状況がよく見られた。地上スレスレに花を求め、産卵のため食草を求めて途方もない距離を迷いながら移動していくということも十分考えられる。送電線沿いでなくても谷沿いの植生のまばらなところは飛びやすいことから拡散ルートになり得る。

飛翔力を裏付けるデータもいくつかある。弘前市第2中学校校庭(谷川、1956)、弘前市石川大仏公園(下山、1957)、青森市浜田玉川(加藤、1991)などの記録。これらは至近の生息地から飛んできたとする5～7キロもの距離となる。このようにして、下湯高地とか入内のヒメギフは十数年から二十数年の間に、一つの考えられる拡散元として平賀とか黒石などの南八甲田の西麓が考えられ、ここからきたものと考えられないだろうか。

青森市域で続々と記録!!

青森市域では、この後、各所でヒメギフの産地が発見されていった。

八甲田ロープウェー山麓駅では卵だけの発見だが、この下の萱野高原など北八甲田北西面の駒込、合子沢、横内、荒川(堤川)の各河川の源流～中流域に沿って、生息地そのものは不連続ではあるが、ぐるりと分布圏を形成し、さらに前述の西南の入内川、そして北東の野内・貴船・浅虫川の各流域にも及んでいる。標高は約50メートルから600メートル地帯。

この中でも、極めつけは「やぶなべ会」メンバーの三浦博氏による、青森市の市街地からすぐの戸山団地背後の雑木林からの大発見であった。1986年のことで、この個体は斑紋に、ある一定の特徴を備えていて、環境全体が二次林の内部という安定性に富んだ理想的ものであることから、ずっと昔から人知れずひっそりと「ヒメギフの楽園」を守ってきた可能性が強い。

再び、生物部時代のこと

青森っ子には信じられないような、この20年間の北八甲田をグルリと巻いた、

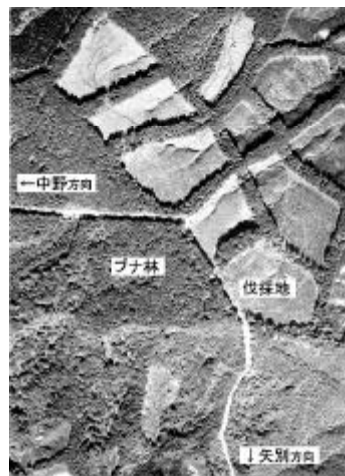


写真3 下湯高地600m地帯の空撮
(1985年5月撮影)

立て続けの発見経過を見ると、生物部の沢谷先輩のまぼろしの目撃記録がにわかに真実味を帯びてくるのである。

私は、生物部の現役から抜け出すとき「青森の蝶」(1957)という小冊子を作成した。これには仲間と調べた、青森市域から記録された 91 種のチョウを解説した。巻末の「追加記録の可能性」の項でヒメギフをあげ「沢谷義貞氏は(青森市)横内水源地で本種を目撃したという」と付け加えた。あの時、私も仲間も当の沢谷先輩も、この記録をまぼろしのように考えていた。それ以上、調査で深追いすることはしなかった。

さまよえる?!……二つのルート

およそ半世紀にわたるヒメギフとのつき合いから、北八甲田を取り巻く一連の分布について二つのルートからの拡散を考えるようになった。

一つは平賀町や黒石市中野などの南八甲田西麓から北八甲田へのルート。二つ目は青森市戸山の「かくれた楽園」と横内水源地の「まぼろしの楽園」から北八甲田北西麓と周辺への拡散。

中部地方や東北地方の分布はどのようになされたかは、あまりにも問題が大きすぎる。しかし、青森県の平賀町周辺や戸山、横内水源地の集団は相当の昔からそこに息づいていたのではないか。1945(昭和 20)年という第二次世界大戦以降、日本の高度経済成長に促された山林伐採、植林、各種開発などがヒメギフの分布を攪乱し「流浪の民」化させた。伐採→植林のパターンは一時的に食草、吸蜜源を満たしヒメギフも大発生したが、この環境は長続きできず消滅してしまう。ヒメギフはまた、さまよいながらほかの生息環境を探さなければならない。

ヒメギフチョウの分布はいま浅虫を越えようとしている。このあと、どこまで行くのか。しかし、いままで記録された多くのところは杉林化あるいはブッシュ化が激しく、「春の女神」の美しい姿の見られるところはわずかしかない。

引用文献

- | | | |
|-----------|------|--|
| 新村太郎 | 1950 | ギフチョウとヒメギフチョウ、新昆虫 3(3): 2 ~ 8。 |
| 谷川孝一 | 1956 | 石川町でヒメギフチョウを採集、進化 8(2): 13。 |
| 室谷洋司 | 1957 | 青森の蝶、自刊。 |
| 下山揚功 | 1957 | ヒメギフチョウ旧市内で採集、みちのく通信(73)。 |
| 室谷洋司・白山一訓 | 1986 | ブナ林樹種更新による一時的オクエゾサイシン増殖とヒメギフチョウの生態、青森の蝶 9(4): 115 ~ 139。 |
| 加藤睦雄 | 1991 | 青森市街地でヒメギフチョウを採集、青森の蝶 10(2): 110。 |